

れた知的好奇心と『Dignity』を結びつける仕組みを構築していく必要があると考えています」と語る。

その一環として、同校では教科の授業の中で「問い」を見つげる仕組みを模索している。現在検討しているのは、各教科で生徒が疑問に思ったことや知識・理解を深めたいと思った事柄を、その都度生徒が専用ノートに書き留め、「Dignity」の授業で「問い」を立てる際に、そこからテーマを選ぶという仕組みだ。疑問や関心を持った事柄を書き留め、分類することで、自分が気づけなかった興味や適性が見えてくるとの期待もある。

もう1つの課題は、「Dignity」の成果を客観的に測る評価方法の開発だ。現在、ブランドデザインに沿ったルーブリック作成の真ただ中にある。

「情緒的なつながりが従来の日本の教育の特徴でしたが、グローバル社会では日本的な価値観だけでは通用しません。教育を科学的に捉える視点を養うことで、学校全体の教育力をさらに高めていけるよう工夫していきたいと思っています」（柳瀬先生）

キャリア教育における探究学習

島根県立江津高校

キャリア教育の中に探究学習を位置づけ、社会における自分のあり方を深く考える

島根県立江津高校では、2015年度より「KAWARAプロジェクト」と称し、地域の強み・弱みを考える探究学習を推進している。16年度からはベネッセの「進路サポート」を導入してキャリア教育の基盤とし、その流れの中に探究学習を位置づけ、指導の体系化、教師の負担軽減を図っている。

「KAWARAプロジェクト」で地域に根差した探究学習を開始

島根県立江津高校は、島根県中部の日本海に面する江津市にある小規模校である。人口減少や産業衰退が進む地域の実情を踏まえ、地方創生を担う人材育成を目標に掲げて、2013年度から3年間、「総合的な学習の時間」を利用した「Global Career Education」(GCE)と称するキャリア教育を展開してきた。

15年度、前任校で探究学習を主導してきた門脇勤先生が赴任したのを機に、同校は探究学習の再編に乗り出す。取り組みの理念を明確化する

のために、地域の地場産業である石州瓦にちなんで「KAWARAプロジェクト」という探究学習を、1年生でスタートし、より生活や地域に根差したキャリア教育を目指した。

「キャリア教育は、狭い意味での進学先選択や職業選択にとどまらず、社会の中での生き方、あり方を学ぶものだと考えています。そのため、地域の課題を探究していく中で学んでいくことが、身近でリアルティがあると考えました。瓦は一見、家や家具など目に見えるものだけを守っているように思いますが、実はその下には人々の生活や喜怒哀楽といった目に見えないものもあり

島根県立江津高校

永岡徹郎 ながおか・てるお

教職歴20年。同校に赴任して3年目。進路指導部長。「生徒とともに歩みたい」

島根県立江津高校

門脇勤 かどわき・つとむ

教職歴16年。同校に赴任して2年目。キャリア教育地域連携推進リーダー。『どんな時代でも、挑戦し続ける人を育てたい』

島根県立江津高校

◎「思慮・高邁・貫徹」を校訓に地域・社会を幸せにする力を培う。13年度から3年間「地域でつなぐキャリア教育モデル事業」の指定を受けた。

◎設立 1958(昭和33)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約70人

◎2016年度入試合格実績(現役のみ)

国立大は、和歌山大、島根大、山口大、島根県立大、山口県立大に12人が合格。私立大は、京都精華大、摂南大、岡山理科大、広島文教女子大、広島工業大、福山大、徳山大、四国大、徳島文理大、福岡大などに延べ29人が合格。

◎URL <http://www.gonhsu.edu.jp/>

ます。探究学習を通して、そうした目に見えない大切なものや課題に気づき、それを守ったり改善したりする経験を積んでほしいと思います」と門脇先生は語る。同校のキャリア教育にはもう1つ課題があった。探究学習やインターンシップ、

地域人材による講演会など個々の内容は優れているものの、取り組み相互の関連性が薄く、すべて単発の取り組みに終わっていたのである。進路指導部長の永岡徹郎先生は次のように述べる。

「GCE全体を通してどのような生徒を育てたいのかが見えにくかったのが最大の課題でした。地域の課題を知り、その解決策を考えることで、社会とのつながりを実感し、自身の進路を主体的に考えてほしかったのですが、日々の学習に熱意を持って取り組むような成長は見られませんでした」

そこで16年度、同校はキャリア教育の体系化を実現するために、学校の方針とコンセプトがほぼ一致しているベネッセの「進路サポート」を導入。メイン教材である「進路探究ワーク」を軸としたキャリア教育の一環として「KAWARAプロジェクト」も位置づけられることとなった。

**地域の課題について考える
経験が人生の土台になる**

同校のキャリア教育の最大の特徴

図1 キャリア教育の流れ（1年次）

平成28年度 キャリア教育のベースとなる学び
進路探究ワーク 1（1年生用）

学期	日付	曜日	時間(分)	探究ステップ	テーマ	ねらい	備考
1	4月19日	火	50	課題設定	A 進路探究を始めよう	なぜ進路探究が必要なのかを知る 進路探究をする上で大切なポイントを知る 今の自分を知り、高校生活で取り組みたいこと の目標を立てる	・新入生宿泊研修の事前研修で実施
	4月26日	火	50	情報収集	B 自分のことをもっと知ろう	将来の進路を考えるためには、自分を理解 することが大切だと知る 自分を理解するために、強みを見つける方 法を知って、実践できるようになる 自分の強みを将来どう生かしていきたいかイ メージできるようにする	・新入生宿泊研修2日目に実施
	6月21日	火	50	情報収集	C 変わりゆく社会との かわり方から 職業・学問を探究しよう	社会が変化の中で、職業・学問も変化し てきたことを知る 社会にはいろいろな課題があり、それぞれ に職業・学問がかかわっていることを知る 自分たちが生きる社会は、自分の力でよくし ていくことができることに気づく	・6月に 保育所実習（家庭科）
	7月6日	水	50	情報収集	D 社会と“私の”かわり方を 考えよう	社会の課題を解決するためには、様々な かわり方があることを知る 自分の進路についても、社会とどうかわ るかという視点で、考えられるようになる 自分が学びたい学問/働きたい職種・業種 の候補を挙げられるようになる	・7月26日（火）に GCE KAWARAプロジェクト ～江津市の強みと弱み講座～ を実施（江津市総合戦略） ・学園祭初日に GCE KAWARAプロジェクト ～ポスターセッション～
2	9月13日	火	50	整理・ 分析	E 様々な観点から文理選択を 考えよう	文理選択において大切なポイントを理解す る 自分の文理選択について複数の観点から考 える 自分の選択について選んだ理由が語れるよ うになる	・9月に 福祉施設実習（家庭科） ・10月19日（水）に キャリア教育講演会 ・10月 or 11月に 鳥根大学訪問を実施予定
	10月18日	火	50	整理・ 分析	F 経験を振り返り、 これからの進路を考えよう	これまでの高校生活でどんなことを学んだ のかを振り返る 進路について今考えていることを整理する これからの高校生活でどんなことに取り組 んでいきたいか考える	
3	12月13日	火	50	まとめ・ 表現	G 人に伝わる文章の書き方を 身につけよう	意見を伝える時には、そう考えた理由を示 すことが必要だと分かる 説得力のある理由を示すためのポイントに ついて理解し、実践できるようになる	
	1月24日	火	50	まとめ・ 表現	H 探究してきた進路について 整理しよう	進路探究チェックに取り組み、進路探究へ の取り組み度合いを確認する 進路探究レポートに取り組み、将来取り組 みたいことや卒業後の進路について述べる	・進路探究チェックと進路探究レ ポートを提出すると、進路探究 の記録（生徒個人表）が返却さ れる
	3月15日	水	50	まとめ・ 表現	I 学びを振り返り、 今後の目標を立てよう	「進路探究の記録」を用いて、1年間の進 路探究の取り組みを振り返る 今後に向けて伸ばしていきたい観点を挙げ られるようになる 今後取り組みたいことが具体的に決められ る	・3月に GCE KAWARAプロジェクト 発表会

* 学校資料を基に編集部で作成。

は、「進路探究ワーク」（図1）の探
究のステップに沿って学校内の進路
行事を再編し、これまで単発的に行

われていた個々の取り組みのつなが
りを意識した指導としたことだ。
進路探究の必要性を感じさせるこ

とから同校のキャリア教育はスタ
トする。4月の新入生宿泊研修で「進
路探究ワーク」の使い方、進路探究

のポイントなどを知り、高校3年間の目標を立てる。その上で、自分のことを理解する大切さを知り、自分の強みを見つける方法、それを将来にどう生かすかを考えさせる。

6月は「変わりゆく社会とのかかわり方から職業・学問を探究しよう」をテーマに職業・学問に対する理解を深め、自分の進路と社会とのかかわりについて考える。これと併せて保育所実習を実施し、働くことの意味を実地で経験するとともに、翌月の講演会への参加を見据え、外部講師を招いてインタビューの方法やマナーを学ぶ。

7月は「社会と私のかかわり方を考えよう」をテーマに、「進路探究ワーク」で社会の課題を解決するためののかかわり方について学んだ上で、「KAWARAプロジェクト」として「江津市の強みと弱み講座」を実施。雇用の確保、定住化の促進、少子化対策といった、市が抱える課題の解決に向けて策定された「江津市総合戦略」の4つの基本目標・方針（「しごとづくり」「ひとのながれ」「結婚・

出産・子育て」「まちづくり」）について、市が推薦した11人（9ブラス）の講師による講演・質疑応答を行う。生徒はグループに分かれて各ブラスの話聞き、学んだことや考察したことをポスターにまとめ、2学期初めの学園祭でグループ発表を行う。

地域の課題をテーマに据えたのは、卒業後、江津市を離れたとしても、その体験が生徒がそれぞれの人生を生きていく上での土台になると考えたからだ。「よりよいコミュニティを構築する力は、どのような地域・職場であっても必要です。江津市の課題はあくまで学びの素材に過ぎません。地域の課題に気づき、それを解決しようとするのが、人生をたくましく生き抜く原点になると思います」と門脇先生は語る。

教師のサポートなしで「進路探究の記録」を作成

9月は文理選択に向けて、選択のポイントを学び、選択理由について考えるために、福祉施設実習や識者を招いてのキャリア教育講演会など

を実施する。12月には「人に伝わる文章の書き方を身につけよう」をテーマに、意見を伝える方法や説得力のある表現方法について学ぶ。

それらの経験を踏まえて、2学期の期末考査後から冬季休業にかけて、個人で取り組む課題研究のテーマを考える。テーマは「KAWARAプロジェクト」で学んだ内容、あるいは個人の興味・関心に応じた内容のいずれかで、担任のアドバイスを受けながら3学期初めまでに決定する。この時、担任は生徒の希望進路や文理選択の結果を踏まえ、「地域課題と自分の進路をつなげてみてはどうか」などとアドバイスを与えながらテーマを焦点化させていく。

すべての生徒のテーマが決まった段階で、学年主任と進路指導課が相談の上、学年団の担任・副担任に1人十数人の担当生徒を割り振ってレポート作成を指導し、生徒は3月の「KAWARAプロジェクト発表会」で口頭発表を行う。

ただし、16年度はこの口頭発表をなくし、「進路サポート」の提出課

題である「進路探究レポート」の提出に代える予定である。「1・2年次3学期の探究学習は、いずれも教師1人あたり十数人の生徒を担当していますが、生徒の人数が多く、きめ細かい指導ができていません。『進路探究ワーク』は、課題設定から

まとめ・表現の方法まで体系立ててつくられており、教師のサポートがなくても生徒自身が自ら課題を見つけ、探究していく方法を身につけることもできます。1年次3学期のレポートは生徒に任せ、1学年の教師を2年生の指導に充てることで、指導を手厚くしていきたいと考えています」（永岡先生）

志望理由書の作成と課題研究のテーマをリンク

2年次は「自分は社会のために何ができるのか」をテーマに進路学習を進める。6月に、「進路探究ワーク」で自分がしたいこと、できることを整理し、目標実現のために今やるべきことを挙げられるようにする。続いて、上級学校での学習や企業での

仕事について学び、それを踏まえて7月の「課題探究講座」で3日間、計6時間をかけて個人の課題研究のテーマ設定の仕方を練習する。この講座では、島根県立大学の教員と学生を招いて、同大学のフィールドワークを参考に課題研究の進め方についてレクチャーを受けた後、「自分は社会のために何ができるのか」を土台とした上で、担任のアドバイスを受けながら研究テーマや計画を立てる。この時、生徒がテーマ設定でつまづかないよう、生徒一人ひとりと相談しながら詰めていく。

10月には、社会を知るためのインターシップを実施する。江津市・浜田市・益田市にある大学や専門学校、市役所、医療センター、企業などを1日訪問して見学・職場体験を行う。その経験を踏まえて11月には、「進路探究ワーク」を使って社会で役立つ知識やスキル、自分のアピールポイントを社会で生かす方法について学び、仮の進路を考えて「志望理由書」を作成する。

それと歩調を合わせて、11月の期末考査後から、2年次3学期の課題研究の発表に向けた準備を進めてい

く。1年次同様、テーマが決まった段階で学年団の教師に担当生徒を割り振り、個人指導を行い、志望理由書の内容を踏まえて、将来の進路とリンクするような研究テーマについてまとめていく。3月には、プレゼンテーションソフトを使って、クラス内で研究成果を発表。生徒の相互評価、教師の評価、及び研究分野のバランスなども配慮しながらクラス代表を決め、代表者は「KAWARA Aプロジェクト発表会」で1・2年生に向けて研究成果を発表する。

キャリア教育の軌跡を ストックすることが重要

取り組んだ「進路探究ワーク」や「KAWARA Aプロジェクト」のアウトプットは1冊のファイルに蓄積していく。「自分の興味・関心、適性がどこにあるのか、本当にやりたいことは何かを知るためには、個々の取り組みを取り組んだままにするのではなく、生徒が振り返り、各取り組みでの気づきや疑問を関連づけていくプロセスが必要」と永岡先生は強調する。取り組みを蓄積していくことで、生徒は志望校決定や推薦・

AO入試の志望理由書を書く際に、高校時代の活動を容易に振り返ることができる。また、教師も、初めて受け持った生徒であっても、生徒の活動歴をすぐに把握できるため、進路指導をスムーズに行えるのである。探究学習の評価も「進路サポート」の導入により容易になった。1年次最後のレポートや2年次の志望理由書が書いているか、「進路サポート」にきちんと取り組んでいるかといった点が評価のポイントになる。その際、課題認識が生まれた経緯、どのように課題を解決したのかといった思いが読み手に伝わる内容ほど高い評価を受ける。

授業や部活動で「問い」を 投げかけることが大切

「KAWARA Aプロジェクト」が始まって1年半。取り組みは緒に就いたばかりだが、「進路サポート」を軸としたキャリア教育の流れが整備されたこと、「進路探究ノート」によって生徒の活動を可視化できるようになったことが大きな成果だ。

課題は探究学習のレベルアップ、特に生徒自身が探究に値する「問い」

を発見する力を育成することだ。そのためには、教科の授業とのリンクが重要になると、門脇先生は語る。

「探究学習をレベルアップさせるには、日常の授業の中で生徒たちの知的好奇心を刺激するような『問い』を意識的に投げかけていくことが重要になると思います。すぐに答えを教えるのではなく、課題意識を持たせるような授業構成を考えなければなりません。そのためには、教師が共通認識を持って、教科の授業はもちろん、部活動や学校行事など、あらゆる場面で、生徒に揺さぶりをかけていくことが必要になるでしょう。『進路サポート』の活用が先生方の目線合わせの第一歩になると期待しています」（門脇先生）

教師間の共通認識に基づいた教育活動全体での揺さぶりには、教師間で「育てたい生徒像」を共有し、各教科で進めているアクティブ・ラーニングの普及を加速させていくことが重要になる。当面は「進路サポート」の活用を通してキャリア教育に対する教師の目線合わせを進め、その後、研修会などを通して多くの教師を巻き込んでいく考えだ。